

I 市立 N 小学校からの質問に答えて

2021.06.08 後藤 忠

教材の読み(聞かせ)方について

語るように読む。登場人物の気持ちで読む。情景を思い浮かべながら読む。だから「間」が生まれ、「語調」が決まる。とにかく教材理解。

保健室では

保健室の今の空気と一年後の空気を比較してみよう。児童は週 1 時間の**道徳**で自己を見つめる学習を続ける。すると自己を見つめる習慣が身についてくる。すると自分を棚に上げて人を責めることがなくなってくる。すると保健室の空気がしっとりと潤ってくる。保健室は**道徳**を映す鏡。

特別支援学級の道徳科授業

道徳科の特質は、通常学級も特別支援学級も同じ。違うのは児童の実態だけ。

特別支援学級は児童の障害の種類や程度に応じたきめ細かな指導が求められている。その鍵を握るのは児童（の実態）理解。

特別支援教育は「教育の原点」と言われている。「教育は児童理解に始まり、児童理解に終わりはしない」そのことを直に体験できるのが特別支援教育。この貴重な立場と機会を存分に生かして、一生懸命「教育の原点」を勉強してほしい。「よいかもしれない」と思ったことは勇気をもってやってみよう。その答えはみんな子供が教えてくれる。決まった方法はない、ただ目的（**児童の道徳性を育てる**）があるのみだ。

教材の種類とその特徴(持ち味)

教材には**読み物教材**（教科書教材、昔話、寓話、逸話、説話、物語、伝記、詩、日記、作文、新聞雑誌記事、自作教材など）や**視聴覚教材**（絵図、写真、紙芝居、スライド、映画、動画、テレビ、ラジオ、録音など）などがある。**読み物教材**には、「文字は消えない」、「児童は各個の体験に基づき自由に情景をイメージできる」という特徴がある。**視聴覚教材**には、「児童の興味関心を引く」、「児童の情景理解を助ける」という特徴がある。しかし、両者にはリスクもある。

視聴覚教材を使用した授業の場合、発問の際に、ピンポイントで発問場面の事実を(場面絵などを使って)しっかり押さえ、それから発問するとよい。

ねらいから外れた児童の反応の扱い

その解決策は教材分析にすべて係っている。登場人物の内面分析を広く、深く行い、ねらいから外れた発言が出ることも十分予想して、補助発問を考えたり、板書計画を立てたりして備える。それが指導だ。

ワークシートへの添削

児童が考えたことに正解、不正解はないことを深く意識する必要がある。また、教師の添削は児童の励みになることも分かっているべきである。では、「ハナマル」は？ 「いいね」は？ どんな添削がよいか、みんなで議論してみてもどうか。添削は即ち評価。評価が変われば授業は変わる。

ワークシートやアンケートの内容

どんな指導効果を期待して「書く活動」を取り入れるのか、何のためにアンケートを取るのか、教師の**指導観**を明確にもつ。「何となく…」は絶対 NG！ 決まった方法はない、目的があるのみだ。

手が拳がらない

その原因は様々考えられる。教材が理解できない、発問が難しくて分からない、発問を忘れた、考える時間が短い、気が散って授業に集中できない、自分の考えを言うのが怖い、恥ずかしい、教材がつまらない、お腹が空いた、おしっこがしたい…。原因が分かれば解決策は見つかる。とにかく児童理解だ。

児童の「価値理解」が「人間理解」を乗り越え、行動として表われるにはどんな授業の積み重ねが必要か。

そんなものはない。もしあるなら、それは教師の奢りだ。児童のことは児童に任せる、児童を信じる。教師ができるのは、児童の 10 年先、20 年先に向けて良質の種を蒔くことだけだ。